

## 芥川龍之介：「杜子春」

□芥川龍之介の小説「杜子春」の主人公は、元は金持ちですが夜寝る所もないほど困っています。

だけれど、ふしぎな老人の力で一晩で大金持ちになります。私は

だと思いました。

□私は、老人のふしぎな力で金持ちになった杜子春は、

だと思いました。

なぜなら

だからです。

もし私が 一晩で / 見知らぬ老人の力で / 自分の力ではなく / 何の努力もしないで 大金持ちになったとしたら、

という気持ちになります / だと思えます。

□杜子春の、

なところが

共感できました。 / 好きになりました。 / わかる！ と思いました。 / なるほどなと思いました。

□でも、

なところが

好きになれません。 / 理解できません。 / ずるいなと思いました。 / 友達にはなれないと思いました。

□作者の芥川龍之介については、

という印象がありました。 / あまり詳しくありませんでした。 / ○○○○くらいしか知りませんでした。

□杜子春は すべてを失って / お金を浪費して / せっかくのチャンスを活かさずに 3回も失敗をくりかえすなんて。

私は

だと思いました。

もし私が 杜子春の友だち / 親 / 老人なら、

する / と言う と思いました。

□杜子春は 2回も老人に助けられます。私は

と感じました。 / と思いました。

□なぜなら、

だからです。

もし私なら

するのにと思いました。

□杜子春はお金よりも仙人になりたいと言いました。私は小説を読みながら、そう簡単に仙人になれるの？ /

やめればいいのに / 私も仙人になってみたい！ / 杜子春にはムリじゃないかな と思いました。 / 感じました。

なぜなら

だからです。

□おそろしい魔性にも口をきかなかった杜子春は、

すると声を出してしまいます。

□私だったら、

だと思えます。

もし杜子春が最後まで口をきかなかったら、

だと思いました。

□今後、杜子春は

ではないかと思いました。 / 考えました。